

フラストレーション場面における 敵意，怒り，言語反応の関係

秦 一 士

The Relationship of Hostility and Anger to Verbal Responses in Frustration Situations

HATA Kazuhiko

Abstract: This study examines the relationship of hostile attribution and emotional anger to verbal responses in frustration situations. Fifty-five female undergraduates were administered the P-F Study Adolescent Form. Then the participants rated each P-F item according to how the frustrator was hostile and how the frustratee was angered. Results showed that items varied significantly in the amount of hostility portrayed. On the basis of these ratings, items were categorized as depicting hostile intent, nonhostile intent, or ambiguous intent. Correlations between scores of hostility and anger were low. Many of the scoring factors of the P-F Study correlated highly with anger scores, but not with hostility scores. Anger scores were high on Extraggression and low on Intraggression among the P-F categories. Three types of P-F items according to the level of hostility did not differ in the effects of hostility and anger on verbal responses.

Key Words: hostility, anger, verbal response, frustration, P-F Study Adolescent Form

1. はじめに

攻撃発生のプロセスについては、フラストレーションが攻撃の原因であるという Dollard ら (1939) のフラストレーション・アグレッション理論がよく知られているが、その後 Berkowitz (1989) はこの理論の修正として、フラストレーションによって否定的感情が生起し、この否定的感情が攻撃を生じさせる要因となるという感情を重視した理論を提唱している。さらに、攻撃にかかわる個人差の重要な要因として、敵意ないし敵対性 (hostility) が、攻撃行動の要因となることがこれまで多くの研究で認められている。

敵意と攻撃との関係について、敵意は攻撃性の一面でありパーソナリティ特性の1つとして一般的に考えられているが、それとは別にある特定の状況において、相手が敵意的であると認知するいわば「状況敵意」というべきものが考えられる。これは、Spielberger

ら (1983) が怒りについて、特性怒り (trait anger) と状況怒り (state anger) に分けたことと対応している。さらに Anderson ら (1996) による一般的感情攻撃モデルのプロセスに当てはめると、敵意を攻撃要因の個人差としての敵意的特性、促進要因としての敵意的感情、状況をどのように解釈するかという評価過程としての敵意的認知に分けることができる。

敵意的認知と攻撃との関連について、Dodge, K. A. (1980) が次のような研究を行っている。教師によって評定された攻撃的な児童と非攻撃的な児童を対象にして、パズルの作成課題で途中まで作ったところで、他の児童がこれを壊したとき、その意図が a) 親切心から、b) わざと、c) 意図があいまいという3つの条件下で、壊した児童の意図を推測させた。その結果、「親切心から」と「わざと」の条件では攻撃的な児童と非攻撃的な児童の間に差が認められなかったが、「あいまい」な条件では攻撃的な児童は非攻撃的な児童に比べて、有意に「相手がわざと壊した」と敵

意的な解釈をしたことが認められた。このような結果に基づいて、彼は社会的情報過程理論 (social information processing theory) として、攻撃的な児童は非攻撃的な児童に比べて、相手の意図があいまいな状況で敵意的と認知する傾向が強く、その結果が攻撃行動の差となって表れると主張している。

また、Graybill, D. & Heuvelman, L. R. (1993) は、敵意と攻撃との関係について、P-F スタディ児童用を用いて各場面の欲求阻止者 (frustrater) の敵意的な程度について調査をおこなっている。その結果、敵意に関して高敵意場面群、中敵意場面群、低敵意場面群の 3 つに分類できることを示している。さらに、これらの場面群と P-F スタディ反応の関係を調べたところ、欲求阻止者の敵意的な意図があいまいな場面 (中敵意場面群) において相手に対する直接的な攻撃である E 反応が、教師における攻撃性の評定との間に有意な関係がみられたが、敵意の強い場面と弱い場面では有意な関係がみられなかったと報告している。この結果から、P-F スタディにおいても Dodge, K. A. (1980) による攻撃の社会的認知理論を支持する結果が得られたとしている。

以上のようなこれまでの研究から、本研究では Graybill, D. & Heuvelman, L. R. (1993) がおこなった研究を参考にして、青年用 P-F スタディ場面において欲求阻止者 (左の人物) の敵意の程度がどのように認知されているかを調べて、敵意の認知による場面分類を試みる。さらに、P-F スタディにおいて認知された敵意が、しばしば攻撃の起因となる感情的な怒りの認知と密接に関係しているか否かを調べる。さらに、敵意と怒りが攻撃的な言語反応とどのように関連しているかを明らかにするが、特に敵意が中程度の場面において、敵意、怒り、言語反応の関連性が他の場面よりも強く現れるかどうかについて検討することなどが研究目的である。

2. 方 法

対象：女子大生 55 名

テスト：P-F スタディ青年用 (三京房)

手続き：P-F スタディ青年用を標準の教示によって、集団で実施した。

次いで、P-F スタディ青年用の各場面の左の人物 (欲求阻止者) がどの程度「敵意」をもっているか、および右の人物 (被欲求阻止者) がどの程度「怒り」を感じているかについて、それぞれ 7 段階 (非常に感

じる：7、かなり感じる：6、やや感じる：5、どちらでもない：4、やや感じない：3、ほとんど感じない：2、全く感じない：1) で評価することを求めた。

3. 結 果

1) 敵意の認知による P-F スタディ青年用場面の分類

表 1 に場面別の敵意と怒りの平均 (標準偏差) と相関係数および主反応 (出現率) を示し、場面は敵意の高い順に配列した。敵意に関して 7 段階評定を用いたので、一応平均得点から、高敵意群は平均 5~6 点台、中敵意群 (あいまい) は平均 3~4 点台、低敵意群は 1~2 点台というように分類した。Graybill, D. & Heuvelman, L. R. (1993) の研究は、各場面について敵意の有無を聞いて、敵意的と認知した割合が 30~70% を中敵意場面として分類しているの、この研究の分類基準とは同じでない。この研究では表 1 のように、高敵意場面群 (7 場面) : 5, 7, 8, 10, 16, 17, 21, 中敵意場面群 (7 場面) : 2, 3, 6, 13, 15, 19, 20, 低敵意場面群 (10 場面) : 1, 4, 9, 11, 12, 14, 18, 22, 23, 24, と分類した。これらの 3 つの場面群ごとに具体的な場面内容を図 1~3 に示した。

敵意についての 3 つの場面群をまとめた評定平均

表 1 場面別の敵意と怒りの平均 (標準偏差) と相関および主反応

場面	敵意	怒り	相関	主反応 (%)
16	6.46(0.68)	4.38(1.37)	.09	E(51.8), I(34.5)
17	6.33(1.03)	2.51(1.17)	-.03	I(65.5), i(17.3)
10	6.09(1.16)	4.67(1.19)	.10	E(54.5), I(30.0)
7	5.60(0.93)	4.60(1.23)	.39**	E(72.7), I(11.8)
5	5.58(1.20)	2.36(1.23)	.09	i(60.9), I(30.9)
8	5.29(1.38)	4.16(1.49)	.27	M'(46.4), E'(29.1)
21	5.11(1.19)	2.33(1.36)	-.03	I'(35.5), I(30.9)
2	4.75(1.21)	1.91(1.24)	.31*	I(43.6), i(30.0)
19	4.38(1.54)	2.89(1.36)	-.05	I(65.5), i(10.0)
13	3.93(1.76)	4.89(0.99)	.13	E(57.3), m(19.1)
15	3.91(1.96)	2.93(1.28)	.30*	M(55.5), M'(17.3)
20	3.66(1.97)	3.93(1.22)	-.15	E'(39.1), I(17.3)
3	3.35(2.02)	4.51(1.14)	.14	E'(62.7), E(19.1)
6	3.24(1.44)	2.22(1.20)	-.04	I(30.9), m(26.4)
14	2.67(1.67)	3.69(1.06)	-.27	E'(35.5), E(18.2)
9	1.98(1.33)	4.04(0.95)	.00	e(37.3), m(24.5)
11	1.91(1.38)	4.27(1.29)	.19	E(39.1), M(21.8)
12	1.91(1.25)	3.18(1.38)	.17	E'(44.5), i(24.5)
22	1.89(1.04)	2.44(1.45)	.26	I'(73.6), E'(10.9)
18	1.80(1.21)	2.69(1.54)	.29*	E'(62.7), E(10.0)
24	1.78(1.12)	3.24(1.45)	.23	M(56.4), M'(25.5)
1	1.64(0.94)	3.73(1.18)	.27	M(54.5), M'(19.1)
23	1.51(0.89)	2.16(1.29)	.23	m(42.7), E(22.3)
4	1.29(0.62)	2.66(1.18)	.31*	M(68.2), m(20.0)

注：場面番号の下線は超自我阻害場面、* $p < .05$, ** $p < .01$

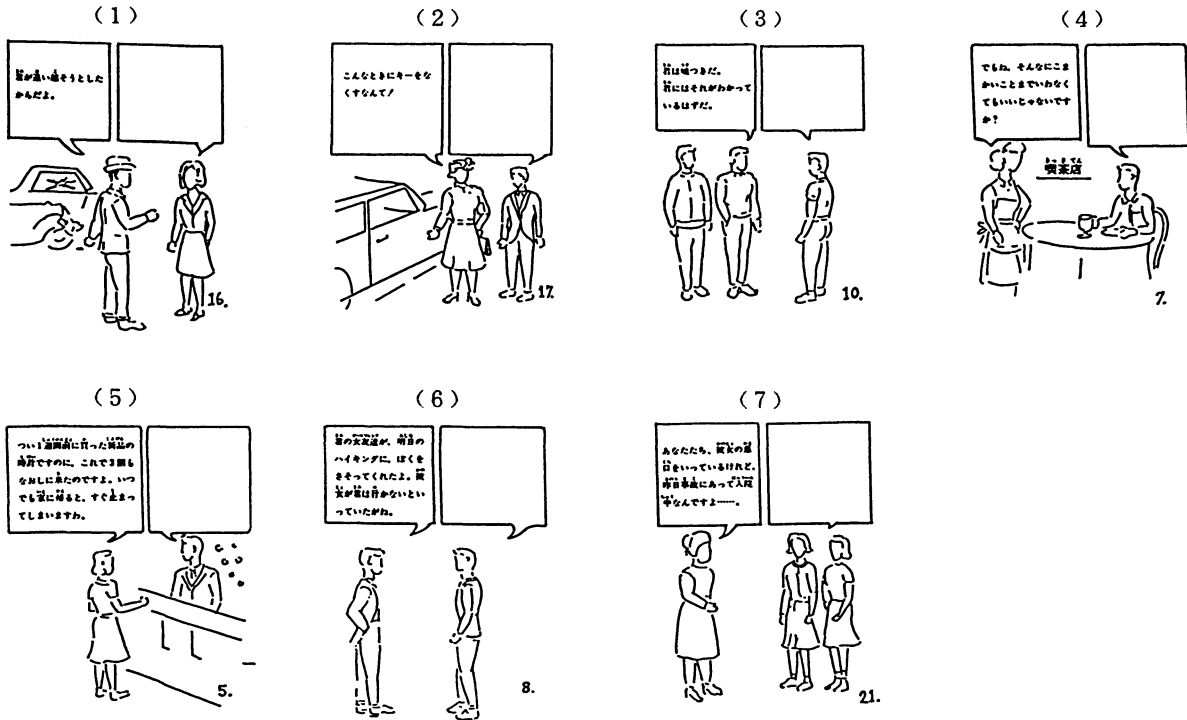


図1 高敵意場面群 (順位)

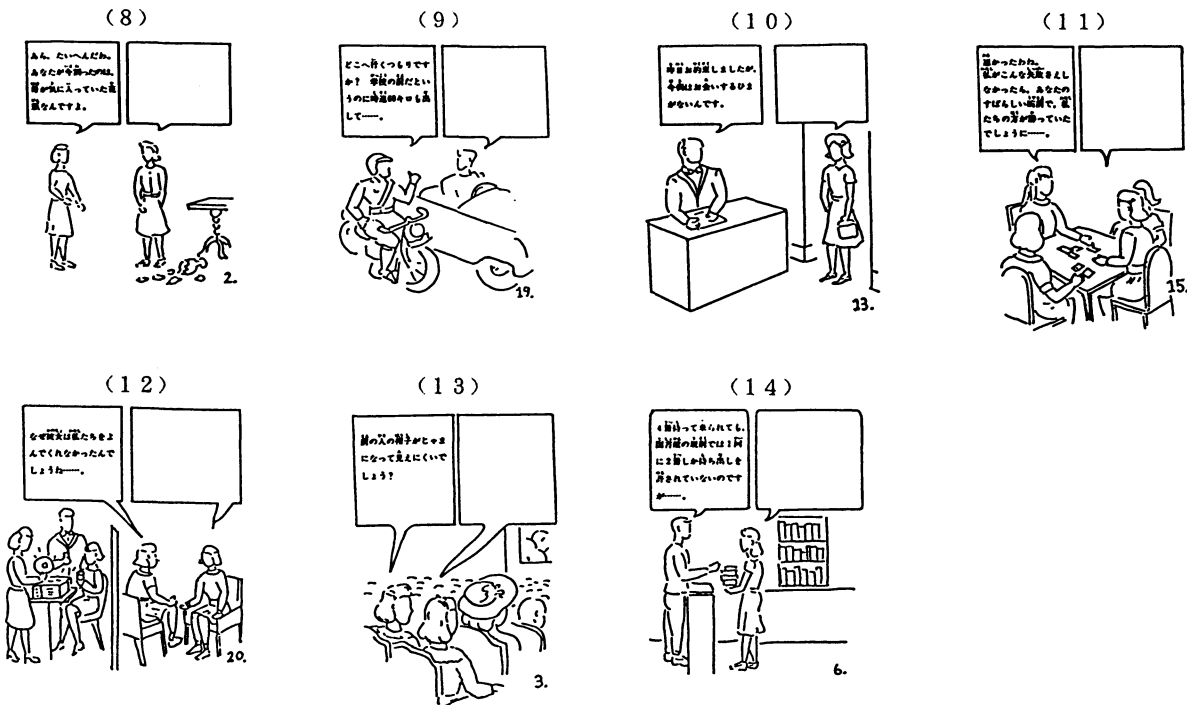


図2 中敵意場面群 (順位)

(標準偏差)は、それぞれ高敵意場面が5.78 (0.61)、中敵意場面が3.89 (0.71)、低敵意場面が1.84 (0.76)であった。1要因分散分析を行ったところ1%水準で有意であり ($F(2,108)=473.77, p<.01$)、またテューキーのHSD検定の結果、3群間にいずれも1%水準で有意差が認められた。

2) 敵意と怒りの関係

敵意と怒りの関係について、全24場面をまとめた個人別の総得点間の相関係数は $r=.216$ で、相関は有意でなく、両者にほとんど関係のないことが示された。

場面別に敵意と怒りの関係について表1からみる

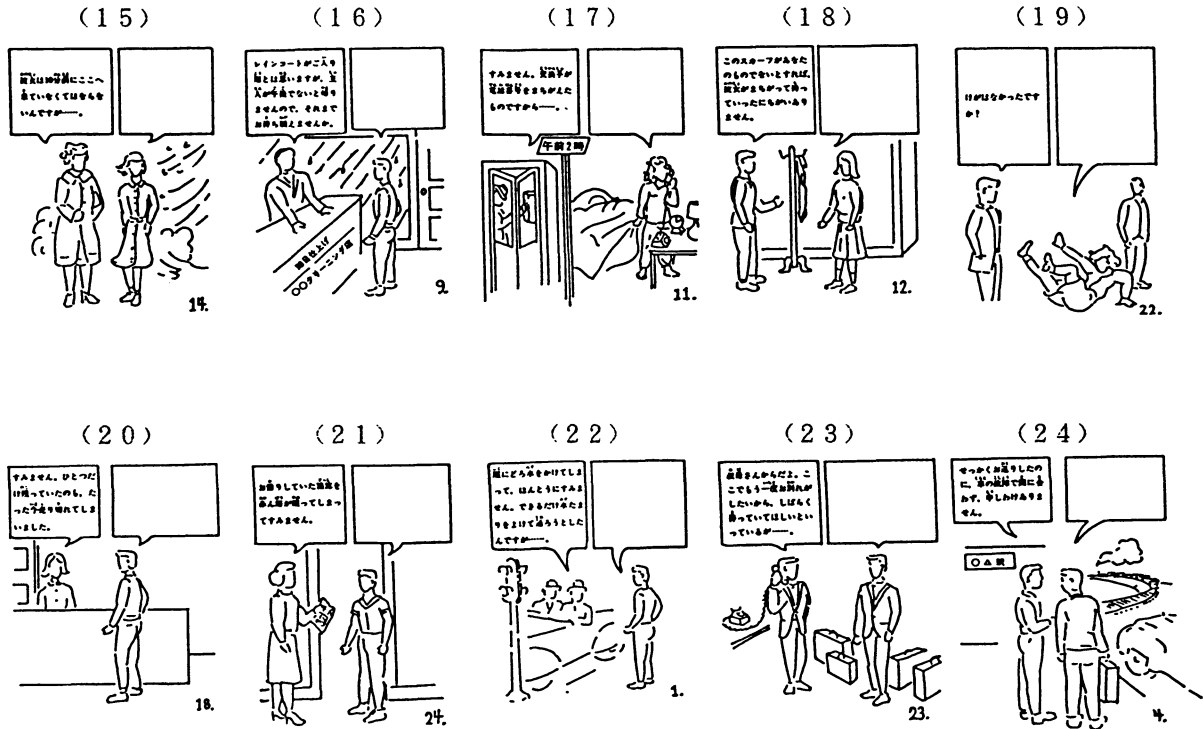


図3 低敵意場面群 (順位)

と、高敵意場面群の場面7 ($r=.39, p<.01$), 中敵意場面群の場面2 ($r=.31, p<.05$)と15 ($r=.30, p<.05$), 低敵意場面群の18 ($r=.29, p<.05$)と4 ($r=.31, p<.05$)などが有意な相関であった。さらに、3つの場面群ごとに敵意と怒りの相関を求めたところ、それぞれ高敵意場面： $r=-.001$, 中敵意場面群(あいまい場面)： $r=.119$, 低敵意場面： $r=.238$ であり、いずれの場面においても有意ではなかった。

また、敵意の程度によって3つに分類した場面群ごとに怒りの平均(標準偏差)を求めたところ、それぞれ高敵意場面が3.57(1.11), 中敵意場面が3.33(1.14), 低敵意場面が3.21(0.71)であり、3群間の差がほとんどなく、敵意と怒りの関連性は、敵意の程度によって変わらないことが認められた。

3) P-F スタディの評点要素と敵意, 怒りの相関

P-F スタディの評点要素と敵意, 怒りそれぞれの相関を求めたのが表2である。

P-F スタディの評点要素と敵意との間で有意な相関は全場面でも M' が $r=-.33$ ($p<.01$), 敵意の程度別場面では、あいまい場面でも $M-A$ が $r=-.40$ ($p<.01$), $MA+I$ とは $r=-.47$ ($p<.01$) が有意であっただけで、他の高敵意場面と低敵意場面では全く有意な相関は認められなかった。一方、怒りの方では、相手を攻撃する他罰の E, アグレッションの他責である E-A,

直接的に相手を攻撃する E-E などとは有意な正の相関が、自責や無責などにかかわる評点要素では有意な負の相関が多く認められた。

さらに、敵意と怒りの程度に関して、平均値を基準として対象を上位・下位群別に4つにグループ分けして、P-F スタディの各評点要素ごとに2要因分散分析を行った。

その結果、表3のように敵意に関する主効果は全く認められなかった。一方、怒りについては多くの評点要素に主効果がみられ、他責や他罰に関する評点要素は怒りの高群が高い値であり、自責、無責や無罰などにおいては怒りの高群が低い値であることが認められた。

また、表1に示された各場面の主反応の評点要素を他責、自責、無責に分けて、それぞれの場面群における怒りの程度(平均(標準偏差))を求めたところ、他責場面群は4.08(0.58), 自責場面群は2.38(0.67), 無責場面群は3.15(0.72)で他責場面群が最も高かった。1要因分散分析では ($F(2,108)=37.04, p<.01$) で有意差があった。テューキーのHSDによる多重比較を行ったところ、他責、自責、無責の間にはいずれも1%水準で有意差が認められた。つまり、主反応からみた場面群における怒りの程度は「他責」→「無責」→「自責」の順に低くなっていることが明らかになった。

表2 高敵意・あいまい・低敵意場面別の評点要素と敵意および怒りの相関

評点要素	敵 意				怒 り			
	高敵意	あいまい	低敵意	全場面	高敵意	あいまい	低敵意	全場面
E'	.07	.10	-.06	.14	.13	-.04	.08	.11
E	.05	.12	-.03	.09	.39**	.57**	.48**	.58**
e	-.09	.01	.25	.15	.26	-.20	.31*	.22
Y'	-.04	.13	-.11	-.03	.02	.31*	-.20	-.07
I	.12	.14	.07	.12	-.22	-.02	-.01	-.17
i	-.00	-.16	-.14	-.23	-.29*	-.43**	-.00	-.34*
M'	-.04	-.22	-.19	-.33*	-.26	-.14	-.20	-.25
M	.17	-.02	-.11	.03	.01	-.10	-.46**	-.30*
m	-.24	-.25	.12	-.16	-.42**	-.23	-.31*	-.46**
E-A	.02	.19	.10	.22	.54**	.42**	.58**	.65**
I-A	.04	.10	-.14	-.08	-.41**	-.19	-.11	-.42**
M-A	-.08	-.40**	-.04	-.04	-.25	-.37**	-.40**	-.59**
O-D	-.01	.02	-.15	-.06	.00	.03	-.08	-.06
E-D	.17	.19	-.06	.20	.23	.37*	.08	.36*
N-P	-.17	-.24	.24	-.15	-.24	-.47**	-.00	-.33*
<u>E</u>	.03	-.19	-	.03	-.10	.17	-	.22
<u>I</u>	.05	-.14	-	-.06	-.10	.14	-	-.07
<u>E+I</u>	.06	-.27	-	-.03	-.14	.25	-	.09
<u>E-E</u>	.03	.22	-.02	.09	.44**	.55**	.48**	.55**
<u>I-I</u>	.06	.26	.07	.17	-.26	-.01	-.01	-.12
<u>MA+I</u>	-.04	-.47**	-.04	-.26	-.36*	-.15	-.57**	-.56**
GCR	.06	.07	.04	.23	.06	.12	-.35*	-.26

*p<0.05, **p<0.01

低敵意場面では E と I がともに出現していない

表3 敵意と怒りによる群別の評点要素の平均(標準偏差)と2要因分散分析

評点要素	群別の平均(標準偏差)				分散分析(F値)		
	HH(N=15)	HL(N=11)	LH(N=15)	LL(N=14)	敵意	怒り	交互作用
E'	4.43(2.05)	3.96(1.31)	3.17(2.11)	3.68(1.11)	2.82	0.00	1.16
E	5.30(1.62)	3.27(2.42)	6.40(2.53)	3.86(2.35)	1.92	14.11**	0.18
e	1.87(1.23)	0.82(1.09)	1.40(0.95)	0.89(0.87)	0.48	7.62**	0.93
Y'	1.33(0.85)	1.86(1.19)	1.67(0.94)	1.46(0.88)	0.02	0.39	1.96
I	3.70(1.33)	3.77(1.74)	3.23(1.64)	4.00(1.25)	0.09	1.07	0.73
i	1.43(0.89)	2.32(1.99)	1.67(1.41)	2.18(1.08)	0.02	3.39	0.24
M'	1.10(0.55)	1.77(0.69)	1.53(1.44)	2.29(1.08)	3.06	6.95*	0.02
M	3.08(1.15)	3.32(1.09)	3.00(1.74)	3.43(1.08)	0.00	0.95	0.07
m	1.37(0.97)	2.27(1.05)	1.53(1.15)	2.00(1.21)	0.03	5.37*	0.55
E-A	49.05(8.44)	34.51(9.64)	46.53(15.19)	35.48(8.30)	0.07	19.44**	0.36
I-A	27.49(6.43)	33.96(7.41)	27.77(8.64)	32.12(6.92)	0.15	7.37**	0.28
M-A	23.46(5.64)	31.53(7.25)	25.70(10.16)	32.40(6.37)	0.58	13.15**	0.11
O-D	29.08(9.83)	32.64(9.44)	27.05(8.93)	31.19(6.89)	0.53	2.61	0.02
E-D	51.09(7.57)	44.38(8.85)	53.54(10.63)	47.51(10.05)	1.23	6.39*	0.02
N-P	19.84(8.69)	22.98(11.99)	19.41(10.83)	21.31(5.00)	0.17	0.97	0.06
<u>E</u>	3.55(2.66)	1.95(2.63)	1.99(3.40)	2.26(3.50)	0.57	0.66	1.28
<u>I</u>	5.69(3.97)	3.12(5.13)	4.99(2.80)	5.12(4.07)	0.35	1.24	1.51
<u>E+I</u>	9.24(4.55)	5.06(4.96)	6.91(3.13)	7.38(5.20)	0.00	2.32	3.61
<u>E-E</u>	18.85(7.09)	12.06(8.50)	25.17(10.00)	14.04(9.45)	3.02	14.23**	0.84
<u>I-I</u>	10.05(5.00)	13.02(8.63)	8.78(5.71)	11.68(5.23)	0.59	2.98	0.00
<u>MA+I</u>	29.15(7.41)	34.65(8.34)	30.62(11.24)	37.51(5.48)	0.92	7.52*	0.10
GCR	55.58(13.12)	63.74(15.49)	50.15(15.90)	55.88(14.34)	2.79	3.06	0.09

*p<0.05, **p<0.01

HH: 敵意高・怒り高, HL: 敵意高・怒り低, LH: 敵意低・怒り高, LL: 敵意低・怒り低

4. 考 察

1) 敵意についての場面分類

敵意的と認知された程度による 3 段階の分類は、ある程度恣意的であるが、次の 2 つのことから、分類の妥当性を支持していると考えられる。すなわち、敵意の程度による 3 つの場面間の平均値が分散分析で有意であり、かつ高敵意場面群、中敵意（あいまい）場面群、低敵意場面群の間にもそれぞれ有意差が認められたことである。さらに、標準偏差値の大きさをみると、その範囲は中敵意場面が 1.21~2.02、高敵意場面群が 0.93~1.38、低敵意場面群は 0.62~1.67 となっており、中敵意場面が他の 2 つの群よりも高い値をもつ場面の多いことが認められる。これは敵意の程度の判断が高い方が低い方では、比較的集中していたのに対して、中敵意場面では分散が大きくて、反応の個人差が反映していたことを示していると言える。

敵意の程度による場面の特徴をみると、高敵意場面群は場面 8 を除いていずれも超自我阻害場面であった。Graybill, D. & Heuvelman, L. R. (1993) の研究による児童用の場面とは、内容的に青年用と必ずしも一致しているとは言えないが、高敵意場面群は 2 つの自我阻害場面と 4 つの超自我阻害場面から構成されており、超自我阻害場面の多い点で同じ傾向が見られた。高敵意場面群に含まれる場面をみると、ほとんどがフラストレーションの原因が自己にあって、その非を他者から指摘されたりとがめられている超自我阻害場面である。また、場面 8 は、右の人物が「君のガールフレンドが、明日のハイキングに、僕をさそってくれたよ、彼女が、君は行かないとってたがね。」と言っている場面である。この場面はおそらく相手から「侮辱された」とか「嫌がらせを受けた」と認知されることが多いだろう。したがって、この高敵意場面群に含まれる場面全体の特徴を考えると、これらの場面は「自尊心」が阻害されると認知されていることが共通していると考えられる。

一方、低敵意場面群に属する場面の内容は、いずれも自我阻害場面であり、フラストレーションの原因が他者にある、それに対して相手が謝っている場面である。このような場面に対しては、相手に敵意があったとは認知されない一般的傾向があると言える。

2) 敵意と怒りの関係

P-F スタディの 24 場面の総得点による敵意と怒り

の相関係数は $r=.216$ であり、ほとんど関連はない結果であった。また、表 1 に示したように、場面毎に両者の相関をみても、全 24 場面中の 5 場面に有意な相関が見られるに過ぎなかった。したがって、両者の関係は否定できないものの、積極的な関係があるとは言いがたい。なお、有意な相関が認められた P-F の 5 場面 (2, 4, 7, 15, 18) については、場面の内容において特に共通する特徴は見出せなかった。

敵意の程度によって分類した 3 つの場面ごとに敵意と怒りの相関を求めた結果をみると、いずれの場面も非有意な低い相関しか得られなかった。さらに、3 つの場面における怒りの程度をみても、3 場面ともほとんど同じ平均値であり、その差が認められなかった。これらのことから、敵意のあいまいな場面（中敵意場面）で敵意と怒りの関連が高くなるのではないかという仮説は支持されなかったと言える。

3) 敵意、怒りと P-F スタディ評点要素との関係

P-F スタディの各評点要素と敵意および怒りの相関からみると、敵意は P-F の言語反応とほとんど関係がなかったことを示していた。一方、怒りは P-F 反応との有意な相関が多く、アグレッションの方向が外に向かう他責方向と関連する評点要素との間では正の相関、アグレッションの方向を避ける無責や自分に向ける自責の方向とは負の相関がみられた。これらのアグレッション方向と相関の方向（正負）は、怒りが強いと外部に対する攻撃をもたらし、怒りが弱いと攻撃が抑制されたり避けられるというように、怒りと攻撃との関係についてこれまで一般的に認められている傾向と一致するものであった。

敵意と P-F スタディの各評点要素との間に関連がみられなかったことは、敵意はフラストレーションを起こした「相手の意図を推測する」ので、敵意がフラストレーションの表現として言語反応に至るまでに、攻撃を抑止するような何らかの要因が働いていることが推測される。これに対して、怒りはフラストレーションが生じた「反応する側（人）の感情」なので、直接的に攻撃的な行動と結び付きやすいと考えられる。

敵意的と認知した程度による場面別の怒りや P-F での言語反応との関係について、仮説としては、敵意があいまいな場面（中敵意場面）は他の高敵意場面や低敵意場面よりも、敵意と怒りの関係が高かったり、敵意と他責ないし他罰反応と正の関係があるのではないかということであった。この研究の結果では、表 1 のように、敵意の程度によって分けた 3 つの場面群の

中で、敵意の程度が中程度（あいまい）の場面で敵意と怒りの相関が高くなることは認められなかった。また表2では、3つの場面群の中でP-Fの評点要素との間における有意な相関は、中敵意群（あいまい）のM-AとMA+Iだけであった。これは、敵意が中程度の場面は敵意の分散が高くなるので、ある意味では当然の結果かもしれない。以上のような結果から、敵意、怒りと言語反応の関係は、全体として明確な場面の違いを反映する結果が得られなかったと言える。

なお、怒りとP-F反応との関連で、怒りの程度は他責→無責→自責の順になっていた。他責は、フラストレーションに対してアグレッションの方向を他者に向けた反応であり、怒りによって攻撃が生じやすいという一般的な傾向を支持している。一方、いわゆる非攻撃的な反応である他責と自責の間では、自責よりも無責の方が高い怒りを示していた。これは、無責は相手から何らかの被害を受けながらそれを許容する反応であり、怒りを感じながらそれを直接的に表現せずに、意識的な抑制や無意識的な抑圧をしていることを意味していると思われる。自責はフラストレーションの原因が自己にあることを認める反応であり、感情的には怒りよりもむしろ罪悪感や羞恥心を感じる人が多いだろう。

この研究で得られた結果から結論的に言えることは、フラストレーション場面での怒りの認知が攻撃の引き金になることは認められるが、敵意の認知が直接的に怒りを覚醒させたり、攻撃行動を起こす原因となるとは言い難いことである。また、Dodge, K. A. (1980) や Graybill, D. & Heuvelman, L. R. (1993) などが指摘しているように、「相手の意図が敵意的であるかどうかがあいまいな場面で、攻撃傾向の差が生じる」という理論を明確に支持する結果が得られなかった。これらの結果に関連して、Drillら(1997)は、攻撃的なパーソナリティと攻撃的なビデオの視聴による敵意の評価との関係をみた研究で、非攻撃的なビデオでは差がなかったが、あいまいな攻撃のビデオと同時に、攻撃的なビデオにおいても有意な関連を認めている。したがって、Dodge, K. A. (1980) の理論が攻撃のプロセスで必ずしも普遍的に適用できるとは限らないと考えられる。

この研究結果ではDodgeやGraybillらの研究結果を必ずしも支持しなかったことについて、この研究の対象者が少なかったことや、DodgeやGraybillらの研究では男児を対象としているのに対して、ここでは女子大生を対象としているために、年齢と性という要因

が敵意と攻撃との間に攻撃を抑制するような何らかの要因が強く作用したことも1つの原因として考えられる。攻撃の抑止要因として、Miller, P. A. & Eisenberg, N. (1988) は、攻撃や反社会的行動の抑制要因として、認知的、感情的な反応として同情や共感の効果について、これまでの研究のメタ分析をおこなって、さまざまな測度の同情や共感とさまざまな形の攻撃性との有意な関連が認められると結論している。また、Richardson, D. R., Green, L. R., & Lago, T. (1998) は、共感でもその役割取得 (perspective taking) が攻撃の抑制と関連しているという報告がある。したがって、今後はさらに敵意から攻撃行動に至るプロセスに存在すると考えられる攻撃の抑止要因を含んだ分析によって、攻撃のプロセスを明らかにしていきたい。

文 献

- Anderson, C. A., Deuser, W. E., & Deneva, K. M. 1995 Hot temperatures, hostile affect, hostile cognition, and arousal: Test of a general model of affective aggression. *Journal of Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 434-448.
- Berkowitz 1989 Frustration-aggression hypothesis: An examination and reformulation. *Psychological Bulletin*, 106, 59-73.
- Dodge, K. A. 1980 Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development*, 51, 162-170.
- Dollard, J., Doob, L. W., Miller, N. E., Mowrer, O. H., & Sears, R. R. 1939 *Frustration and aggression*. New Haven, CT: Yale University Press.
- Drill, K. E., Anderson, C. A., Anderson, K. B., & Deuser, W. E. 1997 Effects of aggressive personality on social expectations and social perceptions. *Journal of Research in Personality*, 31, 272-292.
- Graybill, D. & Heuvelman, L. R. 1993 Validity of the Children's Picture-Frustration Study: A social-cognitive perspective. *Journal of Personality Assessment*, 60, 379-389.
- 林 勝造・一谷 彊・中田義朗・秦 一士・津田浩一・西尾 博・西川 満 1987 P-F スタディ青年用 (日本版) 三京房
- Miller, P. A. & Eisenberg, N. 1988 The relation of empathy to aggressive and external/antisocial behavior. *Psychological Bulletin*, 103, 324-344.
- Richardson, D. R., Green, L. R., & Lago, T. 1998 The relationship between perspective-taking and nonaggressive responding in the face of an attack. *Journal of Personality*, 66, 235-256.
- Spielberger, C. D., Jacobs, G., Russell, F. S., & Crane, R. G. 1983 Assessment of anger: The state-trait anger scale. In J. N. Butcher & C. D. Spielberger (Eds.), *Advances in personality assessment* (Vol. 2 pp. 159-187). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates Inc.